

徳田の歴史-16 地獄絵

1/1

この地区には昔から伝わっている“地獄絵”(掛け軸)があります。この絵図は明治41年に徳田地区のある有志の方より寄付をして頂いたもので、関係者の方々により今も丁寧にお守りされています。大きさは約縦180cm、横120cmです。



地獄絵図概要

地獄絵図の中央上部には閻魔大王様、その右下には地藏菩薩様が少し大きく描かれています。絵図の最下部は地獄の底(奈落の底)で極悪犯の処刑の様子が描かれ、又その他地獄内の様子も細かく描かれています。

この掛け軸の御開帳は一年に一度だけ地区住民を対象に“地獄の釜開き”の日(この地区では1/16)に併せて盛大に実施されています。

●地獄絵のルーツ

本来の地獄絵は平安時代中期(今から約1000年前)に天台宗の僧侶、源信和尚によって書かれた“往生要集”(仏教書)に基づき、平安時代から江戸時代にかけていろいろの“絵師”によって描かれ、地獄絵となったものです。現存するこの地獄絵図は初期のものではなく、江戸時代に複製されたものと言われてはいますが描かれた時期や絵師等の詳細な記録は不明です。

※地獄の釜開き

宗教上の地獄の一斉休日で亡くなった先祖の人々の魂が現世に戻って来るとの言い伝えがあります。(1/16、7/16としている所もある様です)

※往生要集

極楽往生に関する重要な文を集めた仏教書であり3巻よりなっている。特に地獄に関する記述は、広く一般民衆にまで影響を与えた。地獄名、罪の内容、刑期等地獄内部の詳細がきめ細かく書かれています。この仏教書に基づいて一般の単行本としても地獄、極楽等の表題で多数発行されているようです。

※絵師

絵を描く人(地獄絵、浮世絵等)。絵師により作風や地獄内の残酷度はいろいろと違いがあります。

僧侶の方々のお話を参考にしています。

H. A